

ティームティーチングに関する調査・研究 — JTE と ALT の意識を比較して —

広島県立賀茂北高等学校 上西 幸治

1. はじめに

日本人英語教師 (JTE) が、英語指導助手 (ALT) と協同授業 (Team-Teaching) を始めて、12年が経過した。その間、様々な試行錯誤が行われてきた。その結果、中学校及び高等学校の生徒のみならず、現場の教師自身にも多大の影響を与えてきた。後述するが、特に、日本人英語教師の英語力向上に関して、大きく貢献してきたことは言うまでもない。しかし、残された問題は数多い。これまで培ってきた成果は成果として大いに評価し、残された問題はその解決のために教師が、可能な限り全力を傾ける必要があるだろう。特に、JTEとALTがお互いの考えを明瞭に示し、コミュニケーションをより一層図り、よりよいティームティーチングの展開のために努力していく必要があるように思う。

本稿では、そのTeam-Teachingについて、アンケートという形式で、ALTとJTE双方の考え、思いを聞いた。その実状把握を通して、今後のTeam-Teachingに役立てていきたい所存である。

2. Team-Teachingと教師

先程述べたように、ALT導入から早12年が経過した。しかし、そのALTを導入したTeam-Teachingの成果については、賛否両論がある。とはいえ、Team-Teaching (特に、高等学校においては、オーラル・コミュニケーションという科目の中での実践が多い) について成果を上げていることは周知の事実であろう。ここでは、和田 (1996, 1997) を参考にして、特にJTEに対するその効果について、(1) 教授活動方法 (2) 教師の英語力 に焦点を当てて言及したい。

教授活動方法に関しては、ALTから学ぶことが多かった。教室内で言語活動をする際、コミュニケーション活動のやり方をALTを通して具体的なものにすることが可能となった。より効果的な授業方法 'Learning by doing' という考え方を実践していく上でも、ALTの協力は不可欠であったといえる。

また、授業中の生徒への働きかけにおいても、ALTからその演出方法を学んだといえよう。ALTは、様々な場面で生徒がコミュニケーション活動に成功した際に、その成功を認めて上手に励ます方法を探る傾向がある。そのやり方は、日本人教師にはあまりない大胆ともいえるものである。日本人なら少し躊躇するところを誉めまくるところがある。そっくり真似をする必要もないが、誉めるときにはとことん誉めて、学習者に自信を持たせ、学習意欲をかき立てていくことも教育の重要な側面である。

教師の英語力に関しては、JTEの表現力・発話力が向上したことが大きな成果である。ALTとのTeam-Teachingを行う際に、授業のプランに始まり、授業実践、授業評価までALTとのコミュニケーションを必然的に英語で行わなくてはならない。そのことが、教師の聞く、話す力の向上

に貢献したといえる。

次に、Team-Teaching をする際には、お互いの役割について確認する必要がある。特に、ALTの授業中の果たすべき役割について明確にしておく必要がある。実際の授業に臨む際にはALTとJTEが事前の打ち合わせをすることによって、その役割を明確にする必要がある。

Richards & Lockhart (1994) によれば、一般的に授業に臨む際、あるいは授業中に教師が果たす役割には以下のようなものがある。

- ①planner ②manager ③quality controller ④group organizer ⑤facilitator ⑥motivator
- ⑦empowerer ⑧team member

とりわけ、Team-Teaching を行う際の役割については、Brumby & Wada (1990) によれば以下のことが挙げられる。

- ①Resource Role ②Organizer ③Motivator ④Monitor ⑤Evaluator

Team-Teaching の場合、このような役割を2人の教師が補完しあいながら果たす必要がある。とはいえ、ALTの方が生徒に対してより学習効果が出やすい役割がある。その一つが、Motivator という役割であろう。英語を実際に使う場面を想定する際、日本人教師ではその場の臨場感などをよりの確に出すことは英語指導助手にはかなわない。彼らの力を借りて、授業活動を実際の場面に近いものにする事が可能であると考えられる。しかも、英語学習ということになれば、JTE が声をかけるより日常的に英語を使用しているALTが実際に話しかけていくことの方が、生徒の英語を学ぼうとする意欲は高まるのは当然である。自分が使った言葉が通じた、英語で会話ができたという感動を生徒が覚えると、その後の学習意欲もより高まり、生徒自身により影響が出るといえる(上田1993、Smith 1995 etc.)。

上記のように、ALT を導入したTeam-Teaching の授業について、様々な効果が指摘されている実状がある。ALTの相手役である日本人教師、彼らに授業を習う生徒、そして英語教師以外の周囲の教師も然りである。特に、コミュニケーションのための英語教育という観点から見れば、学習対象者である生徒ばかりでなく、日本人教師に対しても影響が多であったことは言うまでもない。

3. 研究の目的及び調査方法

3.1 目的

一つの授業を改善していくためには、一人の教師の場合でも、相当な努力を必要とする。1時間の授業の目的に始まり、授業実践の際に必要な道具、副教材などの準備、授業後の評価などすべきことが山ほどある。

ましてや、Team-Teaching ともなれば、2人の教師が一教室での授業実践をするが故に、特に準備段階の話し合いなど、一人で行う授業にはないことがかなりある。したがって、2人の教師が授業を行うために協力し、よりよい授業内容のために創意工夫する必要がある。そのことについてALT、JTE 双方がどのように思い、授業を実践しているのであろうか。

つまり、本稿ではTeam-Teaching をベースにしたオーラル・コミュニケーション(以下、オーラル)授業に関して、実際に、日本人英語教師と英語指導助手自身がどのように思っているのか今までの成果、今後すべきこと、パートナーに要求すべきことなどを明らかにし、よりよいオーラル授業の実践を模索することを目的としている。

3.2 調査方法

今回の調査は、広島県内の35人の県立高等学校日本人英語教師（JTE）を無作為抽出し、アンケート（Appendix 1）を送付して行った。英語指導助手（ALT）に関しては、ALTが常駐している学校を基本にして、20人に英語版を送付した。

送付したJTE 35人の中で、回答を得たのは19人で回収率は54%だった。一方、送付したALT 20人中、回答を得たのは11人で55%であった。

4. 結果と考察

第3章で記述したような研究目的に基づいてこの調査・研究を行った。回収したアンケートデータに基づいて、数項目を取り上げて、以下結果及び考察をしていきたい。

4.1 授業回数

授業の回数に関して、ALTは11人中9人（82%）が満足している。また、JTEは19人中14人（74%）が満足していて、5人（26%）が不満を漏らしている。授業の回数に関してはALTもJTEも約8割の人が満足していることになる。各学校によって多少の差はあれ、現行の回数、週に1回ないし2回程度でよいという教師の意識があることが明らかになった。この点について、不満を持つ教師が多いと予測していたのであるが、結果は異なった。ALTの中にはオーラル・コミュニケーションの授業を単一年だけでやめるのは、あまり効果がないのではないかという意見もあった。ALTの人数の問題、カリキュラムの問題など多くの問題があるが故、容易に解決は難しいところがある。

4.2 オーラル授業の満足度

オーラル授業に満足しているかに関して、JTEは18人中（1人無回答）12人（70%）が満足し、6人（30%）が不満と答えている。一方、ALTは11人全員が授業に満足していると答えている。授業そのものについて、ALTは細かい意見はあるにもかかわらず、全体的にはうまくいっていると前向きにとらえている。一方、JTEの方は、ALTに比べて、多少細かいことを気にするところがあるように思える。そのことが、授業の満足度に影響を及ぼしているところがあるようだ。授業に不満と述べた人の理由は、以下の通りである。

人数が多すぎて会話練習が不活発である	3人
生徒が会話をする機会が少ない	2人
連携がうまくいかない	1人

アルク編集部のOC実態調査（1996）でも、「クラスの人数が多すぎる」が一番多い授業への不満事項であった。しかし、現在のオーラル授業の状況をどのように見るか、今の状況でどのくらいできたか、などに関して、プラス思考でとらえているのがALTのとらえ方のように思える。全体から見ると、上記のことは森の中の木にすぎないところがあるといえるのではなかろうか。

4.3 Team-Teachingの効果

(1) Team-Teachingの成功に向けて

Team-Teachingを成功させるために、一番必要なことに関して述べる。JTEは「教案の綿密な検討」と答えた人が9人（47%）と一番多かった。次に、「ALTとJTEのよりよい人間関係」と

答えた人で、7人(39%)であった。ALTの方は、「よりよい人間関係」と答えた人がかなり多く、11人中6人(55%)であった。ALTもJTEもお互いによりよい人間関係を築くことがTeam-Teachingを成功させるための鍵であると考えているようだ。この点は、Team-Teachingをする上での前提条件とも言えるものではある。

(2) オーラル授業の効果

「オーラル授業が効果を上げているかどうか」について、上げていると答えた人は、ALTは11人全員が効果を上げていると、前向きの評価をしている。JTEの方は、19人中16人(84%)で効果を上げていると答えた人は大半であった。否定的な回答をしている人はALT、JTE双方とも一人もいなかった。このことは、オーラル授業の意義が十分にあると見なしていると考えられる。ただ、同じようにその意義を見いだしてはいるが、両者の意識の程度に差がある。8割以上のALTが「とても効果をあげている」と答えているのに対して、1割のJTEしか同様の回答をしていないのである。この意識の差はどこから生じるのであろうか。

一つには、現実のクラス(生徒)の変化を前向きにとらえて評価しているかどうかがあるといえよう。生徒のよい変化、例えばコミュニケーションをしようとする姿勢の芽生えなどを高く評価すれば、授業の意義も極めて肯定的になる。また、教師の意識の中で目標を高く設定していれば、それに値する結果がでない場合は、教師の評価は当然低くなる。もう一つは、同じように起こる生徒の変容を教師がどのように見ているかである。同じ一つの現象を厳しく見るとプラスに見ていくのでは自ずと評価が異なってくる。このデータ結果から見ると、JTEの方が厳しい評価の仕方、成果について厳しい受け止め方をしているといえよう(cf.和田1997)。JTEとALTの授業評価に対する意識の差異及び生徒の変容に対する見方の違いが如実にアンケートデータに現れているといえる。

オーラル授業が効果を上げているとする意見には、様々な理由が上げられている。「生徒の学習意欲が高まった」「生徒に話す機会を多く与えることができる」「授業に対する姿勢がよくなった」「話す力や聞く力の向上」など、数え上げればきりが無い。回答を得たある教師の文章の中に、「あらゆる点で相乗効果を上げている」という言葉があったが、それがまさに的を射た表現のように思える。

4.4 パートナーへの願い

最後に、ALTとJTE双方の授業パートナーに対する思いについて、質問をした。この質問は答えにくい面があるとはいえ、本音の所で自分自身のパートナーをどのように評価しているのか、述べてもらった。直接相手のことを知らないにしても、間接的にでも相手の思いや考えを知ること、よりよいオーラル授業の展開に繋がると思い、あえて質問項目に取り上げた。

オーラル授業をする際の満足度については、ALT、JTEともに、大半の人が満足していると答えた。ALTは11人中9人(82%)、JTEの方は19人中16人(84%)が肯定的な答をしている。不満を漏らしている理由は、双方とも協力・協調性と授業展開の問題点を上げている。一番答えにくい相手に対する要望について述べる。双方の要望事項は以下の通りである。

<JTEからALTへの要望>

- ①異文化理解のための教材発掘 12人(63%)
- ②ゲーム的な投げ入れ教材の開発 4人(21%)
- ②生徒とより多くの会話 4人(21%)

- | | |
|------------------------------------|----------|
| ④ JTE とより多くの会話
＜ALT からJTE への要望＞ | 3人 (16%) |
| ① ESSクラブへの積極的な関わり | 5人 (45%) |
| ② JTE とのより多くの会話
(雑談、クラスのことなど) | 3人 (27%) |
| ③ JTE の英語力の向上 | 2人 (18%) |
| ③ 何も要望なし | 2人 (18%) |

上記の要望事項を分析すると、以下のことがいえる。

まず、JTE はALT に対して一番強い要望は、「種々の教材開発をして欲しい」という気持ちである。特に、圧倒的に多いのが、異文化理解関連の教材開発である。一般的に、異文化理解の教材は生徒の興味関心を引くことはいうまでもない。生徒が自国と異なる生活習慣、背景、コミュニケーション方法などの違う文化を知ったり、それに気づくようにさせることは、生徒に多大な影響を与え、よりよい学習効果を生む。とりわけ、一つの教室の中で、英語嫌いな生徒が多数存在するという現状（上西1998、広島大学英語教育研究会1989）を考えれば、異文化理解関連の教材開発、そしてその教材による授業実践により、生徒の英語への興味・関心を高めることは、大いに意義深いものがある。その結果として、生徒の実践的な英語力を向上させることができるなら、これを使わない手はないであろう。「異文化理解の教材開発」というALT への要望は、教師自身の中に、生徒に「英語への関心を持ってもらいたい」「もっと英語の力をつけて欲しい」という思いがあるが故に、出た一つの願いのように思える。

一方、ALT もJTE に対して以下のような要望をしている。一番多かったのが、「ESS クラブに積極的に関わって欲しい」というものである。このことは裏を返せば、JTE がクラブ指導にあまり積極的にでないことを意味するのであろうか。その側面も持っている反面、ALT がJTE の仕事について認識が不足している所もあるように思う。日常の生徒への対応（勉強、進路、その他の問題など）や会議など、時間的に出たくても出られない時もある。その点を考えれば、ALT から見れば、消極的と見なされても仕方のない面がある。この点に関しては、時間さえ許せば、すぐに改善できる点である。

次に多い要望が、「JTE ともっと多く話をしてほしい」というものである。これはJTE の姿勢の問題でもある。JTE 自身に、ALT と積極的に話をしようという気がありさえすれば可能なことである。しかし、JTE 個々人にそれぞれの思いがあるのも事実であろう。この点に関しては、第一の点（ESS クラブへの関わり）及び第3の点（教師の英語力向上）と関連があるように思う。つまり、ALT とJTE のコミュニケーションの問題である。意志疎通がどのくらいできているか、あるいはそれをしようとしているかという問題である。双方が十分意志疎通をしさえすれば、ALT は、JTE がESS クラブに積極的にかかわることができない理由をより明確に理解することができるであろう。第2の点も、JTE 自身が積極的になりさえすればよいことだ。第3の点が、1と2の問題に大きく絡むことではある。JTE 自身の英語力の問題である。JTE 自身が自分の英語力を卑下して、消極的になっては致し方ない。確かに、ALT の言うように、JTE の英語力には問題がある場合もあるであろう。英語力を付けるためにも、JTE も話そうとする姿勢を持たなくてはならないと考える。たとえ、JTE が英語力不足を認識しているにしても、それを今持っている力でコミュニケーションしようとする姿勢が必要であろう。力不足がわかれば、勉強をもっとする必要性を感じ、努力しなくてはならない事になる。JTE が自分自身の中に、よい学習サイ

クルを植えつける必要があると考える。

4.5 Team-Teachingの改善方法

Team-Teachingをよりよいものにするために、JTE、ALT双方が具体的にすべきこととして考えていることは下記の通りである。

<JTEの考え>

- | | |
|----------------|----------|
| ①生徒の話す機会を増やす | 17人(89%) |
| ②生徒にもっと英語を聞かせる | 11人(58%) |
| ③JTE自身の英語力向上 | 10人(53%) |
| ④異文化理解の教材開発 | 8人(42%) |
| ⑤生徒の語彙力向上 | 5人(26%) |

<ALTの考え>

- | | |
|----------------|---------|
| ①生徒の語彙力向上 | 8人(73%) |
| ②生徒の話す機会を増やす | 7人(64%) |
| ③異文化教材の開発 | 7人(64%) |
| ④ゲーム・クイズ教材の開発 | 6人(54%) |
| ⑤生徒にもっと英語を聞かせる | 5人(45%) |

JTEの大半が、生徒の話す機会の少なさを指摘している。一方、ALTも同様な点を指摘はしているが、他の点に目を向けていることが伺える。つまり、注目すべき点として生徒の語彙力不足の問題を挙げているのである。ALTの方が、生徒の語彙力について、より深刻に受け止めているといえる。話す機会を増やすことに力を注ぐのはよいが、基本となる語彙力がなければ、コミュニケーションも成立しにくいのは自明の理である。そのコミュニケーションをより円滑に行えるための語彙力を生徒につけさせる必要があると、ALTの方がより真剣に認識しているといえる。先程述べたように、JTEの側も語彙力不足の点を指摘してはいるが、受け止め方がALTに比べて不十分なのかもしれない。JTEはとにかく目の前の聞く、話す力の養成のために様々な授業の中で行う諸活動の工夫などに力点を置いているが故、オーラルの授業の中では、生徒の語彙力増強のための方策について、さほど真剣に考えてはいないことが伺える。

5.まとめ

今回、無作為抽出という形で、Team-Teachingをベースにしたオーラル授業に関するアンケートを行った。焦点を当てたのは、その授業やパートナーについてALTとJTEがどのような意識をもっているかである。ALT、JTE両者の共通した意識は以下の通りである。

- (1) よりよい人間関係がTeam-Teachingを成功させるための秘訣である
- (2) 授業の中で、生徒に聞く、話す活動をもっとさせる必要がある
- (3) 教材開発を積極的にすべきである
- (4) T-T授業について全般的に効果があり、満足している

特に、両者の細かい意識の違いについて4点述べると、以下のことがいえる。

- (1) ALTの方がオーラル授業に対してより満足している
- (2) ALTの方が、Team-Teaching授業の中で生徒の語彙力をもっとつける必要があると感じている

(3) ALTの方が、オーラル授業が効果を上げていると思っている

(4) JTEの方が、より綿密な教案の検討が必要と感じている

最後に、ALT、JTE双方に真摯に受け止めて欲しいこととして、お互いのパートナーに要望していることについて述べる。JTEの側からは、「積極的な教材開発をしてほしい」と強く訴えている。ALTの側は、「クラブへの積極的な参加」と「もっと多くの話し合い」をあげている。双方の考えをより明瞭に知って初めて、お互いのコミュニケーションもよりスムーズにいくし、授業もより円滑に運営されるというものである。JTEが自分自身の考えだけに凝り固まっているのではなく、違う国から来たALTから授業について異なる観点を指摘してもらい、学んでいくのも大切なことである。その他細かい点はあるにしても、この様な双方の思いをくんで、可能なところから実践し、よりよい人間関係を構築し、Team-Teachingを通した生徒のための中身のあるオーラル授業を展開していく必要がある。

最後に、今回の論文は、広範囲の教師を対象とした調査ができなかったが故に、不十分な結果となっているのは否めない。今後は、より綿密な検討を加えて、より中身のあるTeam-Teachingの実践へ向けて、より有効な調査、研究を行っていききたい。

参考文献

Brumby S. & Wada M. 1990 *Team Teaching* Longman

Ministry of Education, Science, and Sports and Culture 1994 *Handbook for Team-Teaching* ぎょうせい

Richards, Jack C. & Lockhart, Charles 1994 *Reflective Teaching in Second Language Classroom*
Cambridge University Press

Smith, C. Richard 1995 「日本の英語教育における外国人教師のこれからの役割」現代英語教育
6月号, 16-17

アルク編集部 1996 「OC実態調査アンケート調査速報」【英語教育事典 オーラル・コミュニケーションの成果を問う】, 17-24

上田明子 1993 「OCを教室で教えるということの意味」【英語教育】11月号, 11-13

上西幸治 1998 「英語教育における英字新聞導入に関する研究——学習者の意識及び影響を中心にして——」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.28, 41-48

大分県高等学校英語教育研究グループ編著 1989 【英語指導助手との協同授業の進め方】
山口書店

神保尚武、酒井志延 1995 【英語教育】別冊「オーラル・コミュニケーションのためのデータ・バンク」大修館

広島大学英語教育研究会 1989 「英語の意識調査(3)」【英語教育研究】32, 71-126

渡邊寛治 1996 「JET Program(me)の現状と課題」【現代英語教育】9月号, 9-11

和田 稔 1996 「AET導入と日本の英語教育」【現代英語教育】9月号, 6-8

----- 1997 「AETに学ぶこと、覚えてほしいこと」【英語教育】5月号, 17-19

Appendix 1

オーラル・コミュニケーション授業 (Team-Teaching) の調査 (抜粋)

<オーラルの授業についてお聞きします>

1. オーラルの授業は、次のどれですか。該当する個所を○で囲んでください。
A B C
2. 実質的には、何年生の生徒に、平均どのくらいの回数、オーラル (Team-Teaching) 授業をしていますか。() の中で該当するものに○をつけてください。複数の学年にALT が入っている場合も、全て書いてください。
() 1年生に (1週間・2週間・1カ月・2カ月・学期) に (1・2・3) 回
() 2年生に (1週間・2週間・1カ月・2カ月・学期) に (1・2・3) 回
() 3年生に (1週間・2週間・1カ月・2カ月・学期) に (1・2・3) 回
3. 現在の回数に満足していますか。
() とても満足 () やや満足 () やや不満 () とても不満
4. 不満と答えた人に、お聞きします。どの学年にどのくらいの回数が適正だと思いますか。
()
5. T-Tの授業をする際の教案の原案は、一般的にどのように作成していますか。該当するもの一つに○をしてください。
() だいたいJTEの原案を検討 () だいたいALTの原案を検討
() ALTとJTE、それぞれが交代で原案を作成し、検討
() 何日か前か当日に、お互いに話し合って原案を作成
() 教科書に即してするので、あまり原案を出す必要がない
() その他 ()
6. T-Tを成功させるために、一番大切なことは何だと思いますか。一番該当すると思うこと、一つに○をしてください。
() ALTとJTEのよい人間関係 () 教案の綿密な検討
() お互いの教師としての自覚 () 実施後の授業評価・検討
その他 ()
7. オーラル (T-T) の授業は効果を上げていると思いますか。
() とてもあげている () あげている () あげていない
() どちらともいえない
8. 7で「あげている、あげていない」と思った理由は何ですか。
()
9. オーラル (T-T) の授業を今後よりよいものにするためには、JTEとして何をする必要がありますか。該当するもの全てに○をつけてください。
() 教師の英語力をつける () ディベートを取り入れた授業を展開する
() 生徒にもっと基本例文を暗記させる () 生徒の語彙を増やす
() 生徒の話す機会をもっと増やす () 生徒にもっと英語を聞かせる
() ゲーム的な投げ入れ教材の開発 () 異文化理解のための教材発掘
その他 ()
10. 全体的に見て、あなたはオーラルの授業に満足していますか。
() とても満足している () やや満足している () やや不満である
() とても不満である

<あなたのALTに関して、あなたの考え・思いについてお聞きます>

1. オーラルの授業を教える際に、あなたのALTに満足していますか。該当するもの1つに○をつけてください。

- () とても満足している () やや満足している () やや不満である
() とても不満である

2. 満足あるいは不満の原因は、どこにあると思いますか。該当するもの全てに○をつけてください。

- () 協力・協調性 () 授業の展開 () 教案作成 () 生徒への対応
() 意志疎通 () 授業に対する熱意 () 日常的な態度
その他 ()

3. 放課後、ALTに主に何をしてもらっていますか。

- () ESSクラブの活動 () 教案作成 () 勉強に来た生徒との話し合い
() JTEとの話し合い () 特になし
その他 ()

4. オーラル (T-T) の授業を今後よりよいものにするためには、ALTに要望したいことは何ですか。該当するもの全てに○をつけてください。

- () JTEともっと話をしたい () デイベートを取り入れた授業を展開する
() 生徒ともっと話をしたい () クラブに出て欲しい
() ゲーム的な投げ入れ教材の開発 () 異文化理解のための教材発掘
() JTEの仕事 (量) をもっと理解して欲しい
その他 ()

ご協力、誠にありがとうございました。